



小説・翻訳

ながまつ
永松
さだむ
定

萩市・山口市
(1904～1985)



【著作】

『万有引力』（昭和12・協和書院）

『人間は美しい矛盾の動物』（昭和33・日本談義社）

【翻訳】

『ユリシイズ』共訳 ジェイムズ・ジョイス著

（昭和6・第一書房）

【閲覧情報】

萩市立萩図書館 ☎083812516355

ほか

永松 定は、昭和期の小説家で翻訳家、大学で教鞭をとった英文学者でもある。

明治三十七年（一九〇四）、熊本県玉名郡菊水町（現・和水町）に素封家で開業医の次男として生まれ、旧制第五高等学校から東京帝国大学文学部に進み、昭和三年（一九二八）に卒業した。在学中から上林暁ら友人たちと同人誌『風車』を拠点に創作活動に邁進した。

またジェイムズ・ジョイスやポール・ジョルダン・スミスなど英文学作品の翻訳と研究に取り組み、昭和八年（一九三三）、同人仲間の伊藤整、辻野久憲とジョイスの『ユリシイズ』を共訳し、また『ダブリンの人々』『万有引力』『ロレンス芸術論』などを次々に出版した。

永松は、同人仲間のほか井伏鱒二や浅見淵、古谷綱武、小田嶽夫ら気鋭の作家たちと交流し、『新潮』の編集者樗崎勤とは親交を重ね、『新潮』に評論を定期的に発表した。この時期は、永松の充実した発展期であった。しかし、昭和十二年（一九三七）、上海への取材旅行の後、強烈な神経衰弱に陥り、さらに郷里の母の大病などで精神的窮地に追い込まれ、逃避行のように帰郷した。

昭和十五年（一九四〇）、母の死を機に心機一転、友人の世話で山口県立山口中学校、次いで萩中学校の英語教師となり、戦中、戦後の混乱期を山口市や萩市で過ごした。永松にとつてやまぐちの生活は、新鮮な驚きの連続だったとし、その経験をも小説『田舎ずまひ』『萩の独楽廻し』『波の音』等に表現した。自身を投影した主人公は、人々の生活には藩政時代の風習が色濃く残っていると感慨、細やかな筆致で活写して、やまぐちの昭和をセピアの風景に閉じ込めた。文学作品として興味深いばかりでなく、生活文化史としても意義深い。

永松は、昭和二十四年（一九四九）、熊本女子大学（現・熊本県立大学）の英文学教授に迎えられた。以後も同人仲間と交わりつつ研究と作家活動を続けた。昭和四十四年（一九六九）に退官した後、北九州大学や梅光女学院大学の教授を務めた。

永松は私小説家だが、評論や随筆にも健筆をふるった。が、なんとと言っても『ユリシイズ』に代表される英文学の翻訳・研究者としての位置が高いといえよう。同時代を生きた評論家高見順は「昭和前期のプロレタリア派と芸術派が入り混じったカオスの時代、永松は芸術派を外さなかった」と永松の時代に流されず、ぶれない創作姿勢を評価している。

昭和六十年（一九八五）二月七日逝去。

（文・高木正熙）



旧制萩中学校（昭和15年）



旧制山口中学校（昭和15年）

永松 定 年譜

（提供・高木正熙―永松定作品集から）

明治37（一九〇四）年

大正2（一九一三）年

大正9（一九二〇）年

大正10（一九二一）年

大正11（一九二二）年

大正15（一九二六）年

昭和2（一九二七）年

昭和3（一九二八）年

昭和5（一九三〇）年

昭和6（一九三二）年

昭和8（一九三三）年

昭和10（一九三五年）

昭和12（一九三七年）

昭和13（一九三八年）

昭和15（一九四〇）年

昭和17（一九四二年）

昭和24（一九四九年）

昭和31（一九五六年）

昭和35（一九六〇）年

昭和44（一九六九年）

昭和45（一九七〇）年

昭和51（一九七六年）

昭和60（一九八五年）

八〇歳

4月8日熊本県玉名郡菊水町（現・和水町）に開業医永松強、母春江の次男として生まれる。

1月、父強49歳で病死。

4月、熊本県立玉名中学から旧制第5高等学校文科科に入学。

4月、乾性肋膜炎を患い一年間休学。

10月、校友会雑誌『龍南』に初の短編「旧友」発表。

4月、東京大学文学部に入学。

5月、相本太郎、秋沢三郎、上林暁ら10人で同人雑誌『風車』を創刊。

3月、大学を卒業。私立海城中学の教師となり、同人誌活動に熱中。

3月、八代市の田川熊三の二女千枝子と結婚。

12月、『ユリシイズ』上巻を第一書房から上梓。（9年に下巻）

4月、日本大学芸術科講師。ジェイムズ・ジョイスの『ダブリンの人々』を金星堂より出版。

ロレンス書翰集『愛と芸術の手紙』（上下）を健文社より出版。

3月、短篇集『万有引力』を協和書院より、『ロレンス芸術論』を昭森社より出版。

小田嶽夫と上海に取材旅行。内山完造、孫文夫人らと面談。

母校熊本県立玉名中学校英語教師となる。

山口県立山口中学校に転任。

8月、山口県立萩中学校に転任（昭和24年）。

4月、熊本女子大学の創立に際して英文学教授として赴任。（昭和44年）小説「田舎ずまひ」を『詩と真実』4・5・6月号に発表。

『ロレンスの手紙』（上下）改訂版を弥生書房より出版。

長編小説『二十歳の日記』を河出書房より出版。

3月、熊本女子大学名誉教授に。

4月、北九州大学教授就任。（昭和46年3月）

3月、『永松定作品集』を五月書房より出版。

4月、梅光女学院大学（現・梅光学院大学）特任教授就任（昭和56年）。

同月、勲三等旭日中綬章受章。

2月7日逝去。

【参考文献】『昭和文学盛衰史』高見 順（文芸春秋）

『昭和文壇側面史』浅見 淵（講談社）

『萩の今昔写真集』角川政治（角川政治）ほか



萩のコマ廻しの風景（昭和22年）

【萩の独楽廻し】（『永松定作品集』五月書房より）

萩で一番気候のいい頃は、春から夏にかけてであると言われている。ミカンの花の甘酸っぱい香いが至るところ鼻をつくく五、六月頃から、空は夢みるように青々と深く深く澄み渡る夏のころ、秋もどうやら、せいぜい九月一杯までだと言われている。（略）

山陰地方の秋は早い。十月の中頃、萩駅近くの通称天神さんの祭りというのがある。その頃からもうバラバラと降り出す時雨が霰始めののだ。昼間カラリと晴れ渡った空いちめんに、急に、黒雲が被いかぶさるかと思える間に、早やバラバラと霰が落ちかかってくる。するとまた忽ち晴れて、黒い雲の晴れ間から、キラキラと、実に美しい太陽の光線が輝き出す。ところがほんの河向こうの方はまだ時雨が降っていると言った有様なのだ。こういう風景は南国育ちの私にとつては珍しかったが、もうこの頃から、早くも萩の人たちは炬燵をしかけてもぐり込み、酒となるのだ。

永松 定